「りゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に伺う。という氣持ちでお届けしています。

りゅうま伝

47号
2023年10月26日
高野竜馬

「母の終活代行」

日々、認知症の母と格闘中の高野です。

認知症は、季節や時間、場所、人の順にわからなくなってくると言いますが、ウチの場合、場所までがおかしくなっています。

毎日のようにデイサービスに通っているのですが、そこを何故かお寺と思っていて、帰り際、いつも「明日もお寺に行くとね？」と聞いてきます。この質問は帰宅しても無限ループのように繰り返されるので、外出といえばお寺と信じ込んでいるのでしょう。

先日も「私(母)、足が痛いから代わりにビデコちゃん(嫁)、お寺(デイサービス)に行ってくれんやろか？」と朝から嫁にお願いしたようで、大笑いしたところでした。

また、人に関する記憶も怪しく私と嫁の名前は覚えてくれているのですが、子ども達の名前は呼びません。(ボケていてもまだ自分の生命線だけは覚えているようです。)

そんな状況ですから、思い切って実家を処分することに。親とは言え、人の物を処分するのは氣が重いですね。決断するまでに2、3ヶ月かかりました。

そんな訳で、この夏は妹達と何度も実家に立ち寄り、必要なものを選別。最後まで迷ったのは母の和服くらいだったでしょうか。

他は思い出はあっても使わないものだらけなので、最終的に家財は丸ごと廃棄業者に処分してもらうことにしました。

驚いたのは、その見積りです。なんと！40万近くするではありませんか！

エアコンだって洗濯機だって冷蔵庫だって、古くはあるものの現役で使えているのに…。テーブルや食器も中古品としての価値はないとのことで、ただ処分してもらうだけ。

この作業を依頼して、「俺はこの先、シンプルに生きよう」って思いました。

何を捨てるかは何を残すかという問題でもあります。

母のモノ、亡父のモノ、家族のモノを捨てながら、人間にとって本当に必要なモノって何だろう、って考えさせられました。

日々、物を買う時、あれだけこだわって、値段だって十二分に吟味しながら買っているにも関らず、氣づけば我が家も使わないものだらけ…。

苦労して買ったものを、最後はお金をかけて捨てる滑稽さ、そして何とも言えない虚しさを感じます。

母の終活を代行してみて、私も家内も同じようなことを我が子にはさせたくないなと痛感しました。

「お金って何だろう？、物の価値って何だろう？」物との付き合い方を根本から考え直す良い機会となりました。

そして今、まずは自分の書斎から整理整頓を進めているところです。

たかの財形事務所
〒819-0374　福岡市西区千里 707-13
090-3407-2123
https://www.takanozaikei.com メール fp.takano@gmail.com